

釋千觀姓橋氏、相州刺史敏貞之子、略○中 或時出淀河邊、自作馬夫、惠往來人、其深於道義、爲如斯也、

〔今昔物語 十三〕理滿持經者顯經驗語第九

今昔理滿ト云法花ノ持者有ケリ、略○中 棲ヲ不定ズシテ、所々ニ流浪シテ、佛道ヲ修行スル程ニ、渡リニ船ヲ渡ス事コソ无限キ功德ナレト思ヒ得テ、大江ニ行居テ、船ヲ儲テ、渡子トシテ、諸ノ往還ノ人ヲ渡ス能ヲシケリ、亦或ル時ニ、京ニ有テ、悲田ニ行テ、万ノ病ヒ煩惱ム人ヲ哀テ、願フ物ヲ求メ尋テ與フ、

〔吾妻鏡 一〕治承四年七月廿三日癸酉、有佐伯昌助者、是筑前國住吉社神官也、略○中 而彼昌助弟住吉

小大夫昌長、初參武衛、又永江藏人大中臣賴隆、同初參是太神宮祠官後胤也、略○中 此兩人奉爲源家、兼日顯陰德之上、各募神職之間、爲被仰御祈禱事、令聽門下祇候給云云、

〔方丈記〕養和の比かとよ、久しく成てたしかにも覺えず、二年が間、飢渴して淺ましき事侍き、略○中 仁和寺に慈尊院の大藏卿隆曉法印といふ人、かくしつゝ、數しらず、しぬる事をかなしみて、聖をあまたかたらひつゝ、その首のみゆるごとに、額に阿字を書いて縁を結ばしむるわざをなむせられける、その人數をしらむとて、四五兩月がほどかぞへたりければ、京の中一條より南、九條より北京極よりは西、朱雀よりは東、道の邊にある頭、すべて四萬二千三百餘りなむ有ける、

〔碧山日録〕寛正二年二月、自正月、至是月、城中死者八萬二千人也、余曰、以何知此乎、曰、城北有一僧、以小片木造入萬四千率塔、一々置之於尸骸上、今餘二千云、大概以此記焉也、

〔雲萍雜志 一〕勢州關の商家に、吉右衛門といふものあり、略○中 篤實の性、人のそねむを愍み、他の人をたのめて異見をなし、己れに敵するものをよくするを以て、終にはあしき輩も隨へり、陽報を待の心、少しもなくして、人々らず隱德を施し、家業のいとまある時は、往還に出て路を造り、溝あるところへ橋をかけ、只後事のためのみに、志を盡すこと、あげてかぞふるにいとまあらず、